た。そのうち4人はすでに還俗し，8人が寺に残っている。

7　親睦のしるし

帰国の日もしだいに近づいている。やってみたいと思うことはいろいろとある。しかし，またとない機会であるから，時間のあるかぎり，できるだけひろく，そしてつまらぬことでも確実にしておくように心掛けている。

帰りの日が近づくと「いつ帰るのか」「今度はいつくるのか」「写真をおいといてくれよ，妻や子供のも一緒に」という声が聞こえる。バンコクまで送って行きたいという者，宛名付きの封筒を要求する者などもある。きっと息子の得度式，娘の結婚式に来てくれという知らせを送ってくることだろう。あるいは田植の手間を乞う手紙かもしれない。「マー・ソイ・ガン・ガン・ドゥー」という相互扶助を頼む言葉が，親近感とともに耳の奥から聞こえてくる。

実際に調査をした1年余りの間，村の人はつねに友好的であったし，開けっぱなしにいろいろと調査に，あるいは雑談に応じてくれた。またその間，物を強請するということもなかった。ときには写真を撮ってくれと要求したり，また薬をいろいろと求めたりすることはあったけれども，それは互いによく知り合った間柄であるからで，一度も不快な感じを受けたことはなかった。ただ物をあたえても「ありがとう」などという言葉はほとんど聞かなかった。はじめは不作法だとも思ったが，これも村という狭い空間で，顔をつきあわせての生活状況では，むしろ親しさを示すもの，「ありがとう」などといわれれば，かえって他人行儀の感じがする。やれば喜ぶし，相手が喜べばこちらも嬉しい。滞在中に多くのサーマキーがこの村にできた。そのサーマキーの印として，愛用のオートバイは今年から開かれる村の保健所に寄贈することにした。

（6月25日　コーンケーンにて）

NASAKOM から AMPERA へ

—インドネシア現地報告—

神　谷　不　二

1

わたくしの調査旅行は2月5日から6月16日まで，約4カ月半。このうち6週間は某財団の好意によって中近東諸国で費したものであり，東南アジア諸国で過した期間は約3カ月であった。この滞在期間は当初の申請予定をだいぶ上廻っている。その理由は，ありていにいって，2，3の国で外貨の実勢レートによる恩恵をうけたからである。反面，かぎられた予算でなるべく長く現地に滞在するため，節約にも相当留意した。ジャカルタで，ほとんどの外国人が泊るホテル・インドネシアを避けて，そのとなりのウィスマ・ワルタ（プレス・ハウス）に泊ったのは，その一例である。後者には前者のようにエア・コンディショナーもなく，調度などもすべて見劣りしたが，住めばけっこう都であった。その証拠に，わたくしがそこへ住むようになってから，各新聞社の特派員たちがつぎつぎとホテル・インドネシアからウィスマ・ワルタへ引越してきて，わたくしが帰国するころには，ホテル・インドネシアに居をかまえる日本人記者は皆無になってしまった。

旅行中および帰国後に，わたくしはすでにいくつかの現地報告を書いた。それらを念のため下に列挙する。いずれもあまりまとまりのないものだが，現地での印象や実感を卒直に伝えようとしたものであることはたしかだからである。

「ベトナムの顔」朝日新聞・大阪版・3月12日
「ベトナム感傷の旅」毎日新聞・大阪版・3月21日
「ネールの幻想」毎日新聞・大阪版・5月16日
「"物情騒然"—ジャカルタの街角で」朝日新聞・大阪版・5月25日
「スカルノ体制のラスト・ページ——インドネ

シア見たまま—」共同通信経由，山陽新聞・7月22日，北国新聞・7月23日その他

「アジアと日本」毎日新聞・大阪版・8月16日

また，これらを総括した上で，旅行中にゆきあたったいくつかの問題点について考察を加えたものとして，

「内政の国・外政の国」中央公論・12月号

がある。これも本稿を補う意味でここにあげさせていただく。

さて，今回の調査旅行の主目的はインドネシアにあった。この国の政治情勢，ことにスカルノ大統領と共産党と軍の三者の関係をときほぐしてみたいというのは，昨年春以来のわたくしの関心事であった。ただし，その後1年のあいだに，情勢は大きく変っていた。昨秋の「9・30」事件の意味を，わが国では一般に十分つかみかねていた。事件後事態がだんだん平静になるにつれて，スカルノ大統領の地位と権限には何の変化もないという趣旨の見解が次第に強まっていた。のみならず，大統領と外相スバンドリオが軍を中心とする反共勢力にたいし巻きかえしを計っている——こういう情報を頭に入れながらわたくしは日本を発った。

出発の半月後，2月21日に大統領が内閣改造をおこない，国防調整相ナスチオンを解任したとのニュースは，「巻きかえし」説を立証するものだと報じられた。当時わたくしはヴェトナムにおり，ヴェトナムの状況を観察するのに忙しく，かつまたインドネシアにかんするニュースに詳しいものが得られなかったので，もどかしい思いに駆られていた。ただ，わたくしの心の中には，根拠は漠然としたものであったが，このまま巻きかえしが成功することによって事態が安定するとは思えないという確信めいたものがあったので，つぎの大ニュースを待つこと切なるものがあった。サイゴンからバンコックへ来た直後，バンコック駐在の日本人記者の幾人かに会って「2・21」以後のインドネシア情勢にかんする詳報を聞きただしたとき，そのうちの一人はわたくしの見通しに賛成してくれた。ただし，彼の意見では，ヤマ場は米の端境期になる5月からコネフォ（新興国会議）が予定されている秋にかけてであろうという。

「もしかしたら，わたくしのインドネシア滞在中に決定的な事件が起きないともかぎらない。」そんなことを考えながら，最初の予定どおりバンコックからひとまず東南アジアを離れることにしてボンベイへ飛立った途端に，「3・11」クーデターが起ったのである。このときもわたくしはインドで，インドネシア関係のニュースの量が少ないのにイライラし，いっそのこと旅程を変更してすぐジャカルタへ飛ぶことまで考えた。しかし，インドネシアへいますぐ入国できるものやら，それさえもはっきりしないし，旅程を大幅にかえれば旅費も大幅に増えることになるので，それは断念した。ただ，「3・11」事件は，わたくしには，意外な事件というより来るべきものが来たという感じだったので，この待望の（!?）ときに現地で際会できなかったのはいかにも残念な気がした。

2

ジャカルタ入りをしたのは，4月30日の夜であった。このとき，わたくしは一つミスをした。シンガポール空港からいよいよジャカルタゆきの日航機に乗ろうとしたとき，インドネシアの入国ヴィザの期限が切れていることを係員に指摘されたのである。その瞬間まで，わたくしはうかつにもそのことにまったく気づいていなかった。インドネシアの入国ヴィザの期限は3カ月。わたくしの場合は中途に中近東旅行がはさまれるので，全旅程の最後になるインドネシアへ入る段になってヴィザが期限切れになることをおそれ，なるべく出発ぎりぎりにヴィザをもらったのだったが，その有効期限が4月26日，つまりミスを発見された4日前だったのである。「ヴィザなしではお乗せいたしかねます。」そういって係員は，すでに計量して奥へ運びこんだスーツ・ケースをわたくしに返してきた。

見送りの人も来ているし，手さげの中にはジャカルタへの土産に用意したシンガポール特製のニギリズシまで入っている。まったく進退きわまった。だが，わたくしはミスには慣れているので，あきらめる気にはならなかった。30—40分後にせまった飛行機の出発時間を気にしながら折衝を続けたあげく，結局，ジャカルタの空港からそのまま強制送還されることになっても異存はないという一筆を書くということで，ともかくも乗せてもらった。その結果は，クマヨラン空港（ジャカルタ空港の名前）へ出迎えに来てくださった大使館の方と現地の日航の方とのお力添えで，その

場でとりあえず5日間のヴィザを貰い，2，3日後，これまた大使館のコネクションがあったとはいえ簡単に1カ月間のヴィザを頂戴した。ジャカルタ滞在が延びたとき，6月に入ってからも，わたくしはもう一度ヴィザの延長を認めてもらった。

要するに，わたくしの経験した時点では，まったく無条件とはいえないが，インドネシアのヴィザの問題はそれほど恐れるにおよばなかった。わざわざ旅行者本人の出頭を命じ，面接まで求めた在日領事の真意を解しかねた次第である。もっとも，それはわたくしの入国3カ月前，つまり「3・11」以前のことではあったが。

みずからの無知を告白するようなものだが，インドネシアで嬉しかったのは，インドネシア語に四声とか五声とかいうのがなかったことである。英イン辞典でも持っていて，必要な言葉を日本人流にしゃべれば，まあ通じる。タイに通算1カ月近くもいてタイ語でタクシーに乗るのがやっとだったのにくらべて，バハサ・インドネシア（インドネシア語）はよく通じる。それに，心なしかタイ人よりもインドネシア人の方が人なつっこいような気がする——これには異論のある方もあろうが，わたくしの感じは今でもそうである。

ジャカルタの生活で往生したのは，ナイト・ライフの乏しいことである。ホテル・インドネシア界隈以外，夜，これといって出かけるところがない。レストランも商店も，露店までが8時か9時にはおしまいである。それと，長期滞在ともなれば食事にもずいぶん苦労する。われわれが進んでゆく気になるようなレストランが限られているので，大使館員のお宅や商社のメスにもたびたびお世話になった。いま一つ，もっとも大きな問題は「足」である。パブリック・トランスポーテイションであるバスは，どの道にも走っているわけでないし，それに第一，文字どうり鈴なりの満員で保安保身上とても乗りかねる。ジャワ名物のベチャ（人力三輪車）は，近距離の場合には結構愛用したが，遠距離だと乗継がねばならないし，もともとスピードはのろい。こうなれば，なるべくタクシーに乗らない主義のわたくしもタクシー以外にないという気になったのだが，そのタクシーがなかなか思うようには利用できない。つまりは絶対数の不足である。わたくしはある日本商社にたのんで，必要に応じてタクシーを廻してもらっていたが，今後ジャカルタで1カ月以上も調査に従事しようという場合には，はじめから月契約で自動車を1台チャーターした方がいいと思う。しかるべきルートを通じて探せば，かならず見つかる。運転手つきで，実勢レートで計算すれば，かなりきついけれどもまあ何とかやりくりのつく値段である。さもないと，能率が半減どころか何分の一かに下ってしまう。何しろ，誰かを訪ねる場合でも，先方へ行ってそこに滞在しているあいだもずっと車を待たせておいて，またそれに乗って帰ってこなければ帰れなくなってしまうのであるから，よしんば必要のたびごとにタクシーが利用できるとしても，けっこう高いものにつく。

3

インドネシアのインフレイションは，わたくしが経験したかぎりでは，ヴェトナム以上にハイ・スピードであった。この国の公定レートは US $1=Rp. B. 10（Rp. B. はルピア・バルーすなわち新ルピア）だが，われわれの目安になるのはホテル・インドネシア・レートである。わたくしがジャカルタへ着いた日には，両レートは一致していた。しかし，その翌日つまり5月1日から，ホテル・インドネシア・レートは US $1=Rp. B. 25 になった。その1カ月後つまり6月1日からは，それが US $1=Rp. B. 70 に改訂された。ホテル・インドネシアのグリルやコーヒー・ショップでは，米ドル建ての定価をルピア貨で支払う。たとえばコーヒーは40セントだから，わたくしが到着した日の値段は4ルピア，翌日からは10ルピア，6月からは28ルピア払ったわけである。約40日のあいだにちょうど7倍になった勘定だ。日本の商社のなかには，駐在社員の給料をホテル・インドネシア・レートにあわせてスライド方式で支払うところもあったが，商社の大半，新聞・通信社，大使館，あるいはわれわれのように固定している者には，これはこたえる。ウィスマ・ワルタのグリルはインドネシア食だけでちょっとわれわれの口にはあわないので，ホテル・インドネシアと無関係にすごすわけにはゆかないからである。

ジャカルタ一の商店街パサル・バルーでも，1カ月半近くのあいだにだいぶ物の値段があがった。本などもときどきポイとあがる。

だがしかし，われわれ外国人が体験したようなインフレの波がインドネシアの庶民生活にそのままモロに押しよせていると考えたら，それは誤りであろう。ヴ

ェトナムでも同じことを考えたのであるが，外国人が接する範囲の物価と現地の庶民生活にかかわる物価とのあいだには，あきらかに断層がある。それがなく，たとえば40日間で7倍というようなインフレにたえず襲われていたとしたなら，いまごろスカルノは民衆に殺されていたであろうし，ヴェトナム人は「20年戦争」に耐えられなかったであろう。ジャカルタでホテルのコーヒーの値段が7倍になったあいだ，米の値段は1キロあたり5，6ルピアでほぼ安定していたのは，まことに印象的であった。（ただし，昨今では6，7ルピアにあがっていると最近きいた。しかし，ホテルの物価高とはいぜんとして比べものにならない。）

では，実勢レートはどうか。わたくし自身は US$1＝Rp. B. 90から150までを経験した。150というのはごく短期間で，その後今日まで大体100前後で安定気味ということである。国内では共産党狩りと関連して中国人への迫害やイヤガラセが続き，対外的にはマレイシア対決政策が継続していたころ，中国人がドル集めにいそしんだ。その結果ルピアの価値が下り，商店から品物が消えた。米の不足が大きくとりあげられ，日本がタイ国で米を買付けて緊急援助したのも，そのころのことである。その後中国人への迫害的行為がおさまり，シンガポール承認およびマレイシア対決政策終結の見通しが語られるようになると，中国人は今度はルピアを必要とするようになった。その結果ルピアの価値が元にもどり，かくれていた品物もだんだん店に現われるようになった。緊急援助のものとは思えない米も出廻った。政治・社会情勢が実に敏感に金や物に反映するところは，まさに今日のインドネシアの縮図であろう。

ちなみに，昨年末 Rp. 1000＝Rp. B. 1 の割合で新ルピアへの切換えがおこなわれたとき，紙幣の印刷がまにあわず，いま流通している新ルピア紙幣はもともとイリアン・バラート（西イリアン）用に用意していたものだときいた。たしかに，現行紙幣には BANK INDONESIA と書かれてあるが，そういう名前の銀行はいまはない。いまの中央銀行は BANK NEGARA INDONESIA である。そういう次第だから，たとえば何千ルピアという金額を全部25ルピア紙幣で持たされて困ったこともあるし，ジャワ島もバンドン以東へゆけばゆくほど，旧ルピア紙幣が多く流通していた。なお，Rp. B. 1＝100 SEN であるが，センは庶民のあいだではまだ意味をもっていたが，異邦人には数すくなく珍しい紙幣というにすぎなかった。

上述の例でもわかるように，インドネシアの経済流通機構を支配しているのは中国人である。これはサイゴンでも，バンコックでも，シンガポールでも接した光景で，異とするに足りないが，問題はインドネシアの中国人差別政策にあるといえよう。タイ人が華僑とうまく同化しつつあるのを目のあたりにしたあとだけに，とくにこの点を感じた。今日，インドネシアにいる中国人約250万のうち約200万はインドネシア国籍を持っている。そのうち，30才以下の青少年層には中国語を読みも話しもできないという中国系インドネシア人さえ相当数いる。しかし，差別政策はこういう人たちにまで及んでいる。一例をあげれば，ナンバー・ワンの大学 UI（インドネシア大学）への入学である。中国系インドネシア人の入学者数は全入学者の5パーセントに押えられ，しかも成績抜群であればかえって不合格になると，むこうで親しくなったある中国系の青年がボヤいていた。成績一番で卒業する者を中国系でなく純粋のインドネシア人にしようという深慮にもとづくものだそうだ。こういうゆき方が果してこの国百年の大計にプラスになるかどうか，わたくしはたいへん疑問に思った。

4

日本でもいわれたかどうか知らないが，ひところジャカルタでは「ア・ラ・インドネシア」という言葉が一部の人たちのあいだでよく使われた。それは，思いきったことをしそうに見えても妙に妥協的になってしまう，その不可解な妥協性を形容する表現であった。前国防調整相，当時の KOGAM（マレイシア粉砕司令部）副司令官（総司令官はスカルノ），現在の MPRS（暫定国民協議会）議長であり，インドネシア国軍の最長老（といってもまだ50才台の若さであるが）であるナスチオン大将は，当時しきりに，いまや「1945年組」にかわって「1966年組」が「革命」のリーダーシップをとるべきであると演説し，次第に反スカルノ化しつつある KAMI（インドネシア学生行動戦線）や KAPPI（インドネシア中高校生行動戦線）を激励していた。両団体の手になる街々のおびただしい落書きも，カーフュー（わたくしの滞在中前半は午後10時から午前4時まで，後半は午前零時から4時まで）の時

間中に，軍の支援あるいは黙認のもとに学生たちによって一斉に書かれるのだということであった。たしかに，前の晩おそくまできれいだった壁に，一夜あければ「MPRSを即時開催せよ」といった類の書きなぐりがデカデカと見られるという情景はしばしばだった。（スカルノはそのころ MPRS の早期開催に反対していた。）大統領自身が「9・30」事件に一役買っていたのではないか——このことは先般おこなわれたスバンドリオ裁判によって明るみに出かかったようにみえたが，スハルト首相みずからがそれを否定する発言をおこなって，沙汰やみになった——ということさえ，識者のあいだでは公然の秘密化しつつあったくらいである。

にもかかわらず，軍は大統領には手をつけたがらず，妥協に妥協を重ねようとする。これは，昨今 KAMI や KAPPI が公然と名ざしでスカルノの裁判を要求するようになっても，いぜんとして続いている。まことに不可解な「ア・ラ・インドネシア」だというわけである。マーシャル・グリーンアメリカ大使は，「ア・ラ・インドネシア」というよりもむしろ「ア・ラ・ジャワニーズ」だといっていた。インドネシア風というかジャワ風というか，その点はともかくとして，この妥協的性格はどこから来るのだろうか。

この国のモンスーン的風土が長年のあいだに国民性を優柔で妥協的なものにしたことは，たしかに争えない。この国の宗教にも，それはいえよう。中東の沙漠に生れた苛烈な一神教は，第二次世界大戦直後に成立したイスラエルをいまだに抹消しようとして団結するほどの執効な戦闘性を，アラブ諸国にあたえている。しかし，インドネシアの回教には，とてもそんな戦闘性はないのである。

けれども，それは国民性だけの問題ではなさそうだ。もっと政治的なものだろう。東西5000キロ（大まかにいって，リスボンからイスタンブールまでの距離），大小幾千とも，（無名の小島まで入れれば）幾万ともいわれ，人種・言語・宗教・慣習・風土などあらゆる面できわめて多様かつ広大なこの海洋国家は，国民的統合のためには強力なリーダーシップとシンボルを必要とする。独立以来長年その需要にこたえてきたのは，まさにスカルノであった。ナスチオン，あるいはスハルト以下の現政府首脳に，スカルノに匹敵するほどの力と威信をもつ人はいない。彼らはそれをよく自覚するからこそ，あえて大統領を温存しようとしている。スカルノ時代を象徴する NASAKOM（民族主義・宗教・共産主義の三位一体）のスローガンはスハルト政府になって AMPERA（臥薪嘗胆）にとってかわられたものの，別の合言葉である REVOLSI（革命）と PANTJASILA（建国五原則＝神への信仰・国民的自覚・人道主義・社会正義・人民主権）はいまでも温存されており，将軍から兵卒まで，教授から学生まで，社長から給仕にいたるまでが，ことあるごとにそれらを口にする。

わたくしがいたころは，まだ，もっとも尖鋭な KAMI や KAPPI も名ざしで「スカルノを裁判に」とはいっていなかった。それをいうようになったのは，スカルノが過ぎし良き日のこと忘じ難く，NASAKOM を NASASOS（共産主義のかわりに社会主義を入れた）といいかえたりして，軍の妥協的態度を見くびって再び巻きかえしを計る姿勢を示したからであろう。軍も学生たちの熱い動きをときに発砲までして押える反面，スカルノを妥協に応じさせるだけの決意は固めている。まさに「二歩前進，一歩後退」のスカルノ「封じこめ」であるといえよう。「3・11」クーデター以降，とくに3月18日のスバンドリオ逮捕以降，スカルノ時代がラスト・ページに入っていることは，この意味で疑問の余地がない。しかし，ジャカルタあるいは西部ジャワはそうであっても，中部・東部へゆくにつれて，大統領にたいする無条件の尊敬が民衆のあいだにいまもって根強いことを忘れてはなるまい。知らないのか，お人好しなのか，ともかくいぜんとして「ブン・カルノ」はわれらの大統領であり，「革命の指導者」なのである。こういう情勢を計算に入れて，学生の過激性を利用しながら一方ではとことんまでスカルノを抱きこんでゆこうとしているインドネシア国軍は，なかなか豊かな政治性をもっているといわねばならない。

5

かつて200万あるいは300万を呼号した PKI（インドネシア共産党）はどこへ行ったであろうか。殺戮された者は40万にも50万にも上るといわれるが，わたくしは20万止りではないかと思っている。（スカルノの言によれば7万8千という。いずれにしても近代史上ベスト5に入る大殺戮であることはたしかであろ

う。）しかし，1割前後という殺害者の数から，相当強大な部分がまだ地下で再建に備えていると見るのは誤りであろう。わたくしの見たところでは，近い将来PKIがカム・バックすることはできないように思う。アイジット以下首脳部のほとんどが殺され，または逮捕されたことにもよるが，それ以上に急激な瓦解の原因になったと考えられるのは，PKIの体質であろう。その性格上少数精鋭でなければならないはずの共産党が，インドネシアでは――これも「ア・ラ・インドネシア」の現われであるが――いたずらに水まし党員が増えてしまった。他の国の共産党がそうであるように，PKIは苦しい日常闘争・反権力闘争の積みかさねを通じて勢力を増大してきたのではなく，権力の庇護のもとに「プリン・プラン」（機会主義者）を吸収してきたにすぎなかったのである。こういう党に，危機にさいしての強靭な二枚腰は期待できないのではなかろうか。

スカルノの時代は終った。問題は，彼が最盛期につくった言葉 —Guided Democracy— がいぜんとして新政府の大きな課題として残されている点であろう。スカルノの「指導民主制」は，結局「指導」だけで「民主」なしに終ってしまった。しかし，およそ国民形成期にある新興国にとって，この両者のバランスはもっとも重要な課題の一つである。対外債務27億ドルという経済的苦境を乗切って近代的発展へのあらたな歩みを踏出すためにも，新政府はこのむずかしい政治的課題を回避することができないであろう。

この点に関連して動向が注目されるのは，いうまでもなく，インドネシア政治の中枢を占めるにいたった国軍の姿勢である。スカルノ大統領のもとで久しく政治的発言力を削がれてきた彼らは，今後は独立戦争以来の伝統である「国民の軍隊」を旗印にして政治指導にも積極的な態度をとり続ける決意を表明している。彼らは，政党をはじめ一般にシヴィリアンの政治家には大きな不信感をもっている。しかし，アダム・マリク外相，ハマンク・ブオノ経済相の存在にみられるように，個々の有能なシヴィリアンを抱えてゆく必要はよくわきまえている。そして，国内建設を看過して空虚な外政主義に走ったナサコム時代を反省して，アンペラ路線は非同盟主義の下における内政中心主義でなければならないとしている。こういう見識がどこまで実際政治の上で具体化するか，当分それを見守りたいと思う。（1966年10月7日）

南アジアにおける乾燥農業と湿潤農業

飯沼二郎

1 まえがき

今度の私の旅行（1966年4月25日～5月31日）は，西は地中海から東はメコン河まで約10カ国の農村と農業を40日でみてまわろうという，大変乱暴な計画であったので，あらかじめ，調査の範囲を物的，技術的な面に限定した。したがって，この報告も社会的な面には，ほとんど触れることがない。なお，農村調査というものは，日本についてさえ，なかなか容易なものではない。まして，外国ともなれば，なおさらのことである。したがって，今度の旅行では，現地の方々にひじょうにお世話になった。とくに，当センターのバンコック事務所には，ずいぶんご迷惑をおかけした。心から御礼を申し上げる。

2 乾燥農業

こんど行ってきた10カ国の内，西からレバノン，ヨルダン，シリヤ，イラク，クエート，イラン，西パキスタンおよびインドのニューデリー附近は乾燥地帯，カルカッタ附近とタイ国は湿潤地帯といえる。ここで乾燥地帯といっているのは，農業にとって水が限定要素になっているような地帯，すなわち1部の灌漑地を除き，農作業の主要目的が，土壌水分の保持にあるような地帯である。表1に，私が行った各都市の年平均気温と年降水量を示してみよう。

すなわち，ニューデリー以西とカルカッタ以東とでは，年降水量が画然とちがっていることが明らかになろう。まず，乾燥地帯から報告を進める。

A 乾燥天水農業

インド以西の乾燥地帯には，2つの農業形態がみられる。1つは，天水に依存する農業であり，もう1つは，灌漑に依存する農業である。乾燥天水農業（いっぱんに dry farming といいならわされているが，よ